ミスター・Ｋの英語教育ワンポイント指導ヒント

千葉県旭市教育委員会外国語教育アドバイザー
千葉大学　教育学部　学校教員養成課程
東京女子大学　現代教養学部　国際英語科　非常勤講師
加瀬　政美

【第２号】　中学校向けバージョン

なぜ中学１年生はリテリングの第１歩としてリプロダクションが有効なのか？

まず、「リテリング」とは、聞いたり、読んだりしたことを、なんらかの補助的なメモ等を見ながら、第三者に、話したり、書いたりして伝える活動です。リテリングを通して、「読解を深めながら、生徒が主体的に取り組めるアウトプット活動」と考えることができます。技能統合であり、表現能力を高めるのに有効の手立ての一つです。
つまり、本文の言語形式を自分の言葉で言い換えたものであり、「リプロダクション」は、文と同じ、あるいはほぼ同じ言語形式で再生されたものです。

中学１年の教科書では、会話（やりとり）に必要な新出文法や語彙が次々に導入される。この時期の教科書本文は対話体が多く、たいてい基礎文法の導入と練習のための素材という性格を強く持っています。よって、この中学１年というテキストのメイン活動の一つが音読であることは極めて合理的である（投野 2022）とされています。そのまま音読し、英文が頭に入り、リプロダクションすれば、それが話すことに直結し、中学２、３年で行うリテリングの土台になるからです。このように、しっかりと「なんのためにこの方法でやっているのか」きちんとメタ言語化しておくと指導にブレがでません。

英語学習には、学習者の理想とする姿として、「Can-Do リスト」形式による学習到達目標が設定されています。それぞれの技能や領域において、「英語を用いて『何ができるのか』を記述した言語能力発達段階を示した記述文」である Can-Do 評価尺度も、学習者が知らなければ効果は上がりません。各レッスンで、リテリングを用いて英語力の何を伸ばすのか、リプロダクションを用いて英語力のどの分野を補強するのか、指導者には明確なプランがなければなりません。

さて、もしあなたが中１の教壇に立ったら、リプロダクションという手法をどのように使い、英語の発話につなげようと考えますか？　考えてみましょう。